国の登録有形文化財（建造物）への登録についての報告

文化財課

国の文化審議会は、令和５年 11 月 24 日（金）に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、新たに県内４件の建造物を登録するよう文部科学大臣に答申した。この結果、官報告示を経て、県内の登録有形文化財（建造物）は 36 箇所、87 件となる予定である。

◎　国の登録有形文化財（建造物）への登録

(1) 概　要

名　　称：「沖縄ホテル旅館棟・レンガ棟・大道門（うふどうもん）・瓦石垣」
登録種別：第３次産業、建築物（旅館棟・レンガ棟）
　　第３次産業、その他の工作物（大道門・瓦石垣）
登 録 地：沖縄県那覇市字大道上大道原 35
所有者・占有者：沖縄ホテル

(2) 解　説

①沖縄ホテル旅館棟（写真１）

安里駅北東の市街地に位置しており、設計は仲座久雄（なかざひさお）氏が行った。西に開いたコの字形平面で中央棟に吹抜の玄関ホールと階段、北棟と南棟に客室を配置している。各階の窓上には庇（ひさし）を廻（めぐ）らし、花ブロックで飾った壁面やバルコニーなどが仲座氏らしい特徴を示し、造形の規範となっている。

写真１

②沖縄ホテルレンガ棟（写真２）

敷地南東に位置する二階建て切妻造（きりづまづくり）瓦葺きである。一階は鉄筋コンクリートのラーメン構造で、煉瓦積（れんがづみ）を化粧で現し、二階は煉瓦造（れんがづくり）とした混構造である。小屋は木造トラス組となっている。外壁に大きめの矩形（くけい）開口を設け、各階二室となっている。戦後沖縄におけるホテル発祥の遺例（いれい）として希少で、再現することが容易でないものである。

写真２

③沖縄ホテル大道門（写真３）

県道 29 号から敷地に至る通路にあるホテルの表門である。一間（いっけん）腕木（うでぎ）門形式で、鉄筋コンクリート造の角柱上部に腕木（うでぎ）を挿し、軒桁（のきげた）を受ける形となっている。屋根は切妻造（きりづまづくり）琉球赤瓦葺で両妻に降棟（おろしむね）をつけ大棟（おおむね）には鬼瓦を据えている。沖縄の伝統建築の意匠で、戦後の沖縄を代表するホテルの入口を飾っている。

写真３

④沖縄ホテル瓦石垣（写真４）

旅館棟の敷地外周を廻（めぐ）る高さ 1.8m、総延長 92mの石垣である。コンクリート造壁体に琉球石灰岩を積み、屋根は琉球赤瓦で葺き、棟（むね）頂部や端部は砂漆喰（すなしっくい）で塗込んでいる。長大な石垣で大道門（うふどうもん）と一体となってホテルの表構えを整え、沖縄らしい景観を形成している。

写真４

(3) 歴　史

昭和 16 年に那覇市港町（波之上）にて、のちに「沖縄観光の父」と呼ばれる宮里定三（みやざとていぞう）氏により沖縄ホテルが創業される。しかし、創業からわずか２年後、沖縄ホテルは軍政下に置かれ、昭和 20 年にホテルは艦砲射撃で全壊した。

戦後、「琉球映画貿易会社」の社長から、再びホテル経営の要請を受け、沖縄ホテルを建てた土建会社「金城カンパニー」社長の自宅兼事務所であった現在のレンガ棟（昭和 24 年築：那覇市大道）を買い入れ、ホテルとして改築した。レンガ棟は建設当初から、暖炉・煙突があり、その後水洗トイレやボイラー等の近代設備が施され、昭和 26 年にホテル事業を再スタートさせた。戦後の沖縄は米軍基地の建設ラッシュで、土建業者が客層の多くを占めていた時代の後、山下清や棟方志功、濱田庄司ら芸術家にも愛されるホテルとなった。

昭和 36 年には現在の旅館棟・大道門(うふどうもん)・瓦石垣、その 10 年後にはホテル棟が建てられた。旅館棟・レンガ棟・大道門・瓦石垣の設計は、沖縄現代建築のパイオニアで、花ブロックの考案者である、仲座久雄氏である。旅館棟は、花ブロックを用いた当時の建築技術が随所に見受けられ、レンガ棟は沖縄県内にある煉瓦造(れんがづくり)で唯一の存在である。大道門に関しては、仲座氏の思い入れで、門構えは守礼門を模した朱色の柱に赤瓦を乗せている。また、瓦石垣も琉球石灰岩の石垣に赤瓦を乗せ、砂漆喰(すなしっくい)仕上げとし、沖縄らしさを醸し出している。